

2

指定校・AO入試の見直し

高校視点での入試改革により入試の競争力を高める

千葉工業大学

2009年度入試から8年連続で志願者を増やし続ける千葉工業大学。今年度入試でも前年度より5割増の志願者を集めた。高校現場の声に耳を傾けることが奏功した入試戦略を探る。

高校の先生目線で徹底的に入試を見直す

私が入職する前年の2008年、本学はどん底状態でした。その2年前には2万人近くいた志願者が半減し、高い留年率・中退率も問題でした。翌年には、併願料の無料化や、キャンパス整備などにより、志願者数は回復したものの、抜本的な改革が不可欠なことは明らかでした。

当時本学の入学者は、推薦・AO入試が半数以上を占めていました。そこで注目したのが、まじめに勉強する入学者が多い指定校推薦です。他大学と比べて入学者の割合が低かったため、これは「伸ばせそうだ」と直感しました。そのヒントを探るため、高校へ

徹底的にヒアリングを行ったところ、大きな問題が2つあることがわかったのです。1つ目は、指定校情報の提供時期を、大学の都合で決め、高校が必要とする時期にお届けしていなかったことです。2つ目は、出願基準が学科ごとに複雑だったことです。そのため、高校に張り出されていた指定校推薦一覧表では、本学だけが「別途相談」となっていました。基準が不明瞭な大学には、面倒で出願しにくかったのです。評定基準は下げずこれを改善したところ、2年間で指定校推薦の入学者を4割以上も増やすことができました。

これは、高校に対する「千葉工大は変わった、難しくなった」というメッセージになります。その結果、高校の先生方はAOで不合格になった生徒に一般入試を勧められるようになり、一般入試の志願者数増にもつながりました。このように推薦・AO入試改革を突破口に質の高い学生確保に努め、今では一般入試の入学者が半数以上を占めています。

入試と広報の両輪でよいスパイラルづくり

入試は、入試そのものだけでなく、広報との連携、大学のブランディングが極めて重要です。一番重要な高校への広報活動については、入試広報課員総出で取り組み、

志願者数の回復と同時に競争倍率も上がり、選抜のできる入試へ

～入試方式別志願者数と合格者数の推移

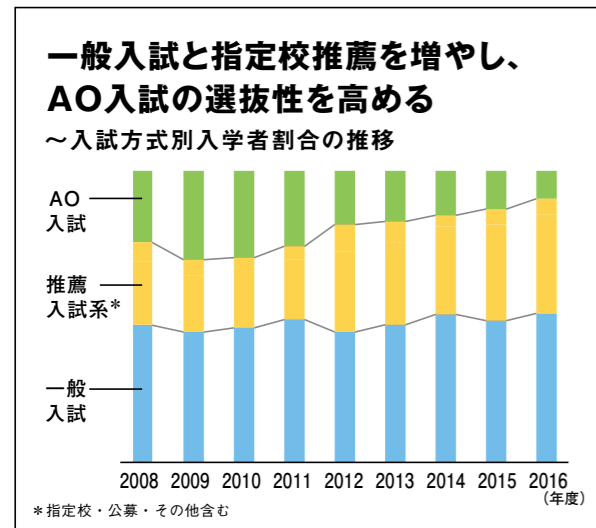
入試年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
入学定員(人)	1,995	1,995	1,995	1,995	1,995	1,995	1,995	1,995	1,990
推薦・AO入試合計(人)	志願者計	1,689	1,727	1,633	1,664	1,732	1,640	1,480	1,697
	合格者計	1,347	1,410	1,318	1,242	1,359	1,299	1,218	1,156
一般入試合計(人)	志願者計	9,877	17,653	19,795	22,173	30,026	33,914	42,199	50,888
	合格者計	4,932	7,937	7,796	7,616	8,632	9,323	10,078	12,719
全入試合計(人)	志願者計	11,566	19,380	21,428	23,837	31,758	35,554	43,679	52,600
	合格者計	6,279	9,347	9,114	8,858	9,991	10,622	11,296	13,875

校の先生は興味を持ってくれません。今は、社会のニーズと本学の研究トピックスや、他大学との違いなど、先生が興味を持って聞いてくれるような話をしています。

高校からの要望にはできる限り応えるようにしています。例えば、ある高校からのAO入試の不合格理由の開示の要望を断っていた結果、その高校からは何年も受験者が出ませんでした。それを改め、2～3年かけて高校との関係を改善した結果、今では受験生を送り出してくれます。併願料無料化も、受験料が高いという高校の問題意識に対応した策の一つです。

保護者への広報も大切です。保護者には、テレビなど、マスメディア

アで取り上げることが効果



的です。本学がマスメディアに流す情報は、「宇宙」「ロボット」にほぼ特化しています。これは今、国が力を入れていいる分野なので社会の関心が高く、技術立国に貢献する人材を輩出するという本学の本分にあつたものです。世間一般が興味を持つと思われる研究成果が出た時点で、その翌日にリリースが出来る体制を整えています。



メディアに取り上げられたことは、タイムリーに高校生にも伝えなくては意味がありません。そのためには、入試と広報が一体となった本学のような組織が機動力に勝ると思います。

課題を乗り越え技術立国に貢献したい

入学者の学力が向上したため、2008年と2015年を比較すると、留年率は13・6%から5・3%、退学率は4・26%から2・75%にそれぞれ改善しました。このような情報は学生を通じて出身

高校にダイレクトに伝わりますから、それも本学の評価を高めることにつながっています。また、基礎学力が足りない学生向けの導入科目受講者も、2011年から比べると20%ほど減少しました。課題もあります。一般入試の志願者数が急速に増えたため、推薦・AO入試入学者との学力差が開いているのです。求める学生像は入試方式別に異なるものの、学力差は小さい方が好ましい。その対策として、指定校推薦での評定基準値の引き上げや、AO入試への学力測定導入などを検討中です。

また、多面的評価入試の取り組みとして、2018年度入試からは、公募制推薦で国語の試験を課す予定です。理工系人材も読解力と表現力が求められます。一時的に志願者は減るかもしれませんが、これが成功すれば、一般入試への導入も視野に入ってきます。

成績がよく、ゼミで活躍する者が多い地方出身者獲得のため、地方試験や学生寮の拡充もします。特に東北は福島原発事故で本学のロボットが使われたことの影響が、近年志願者が大幅に増加中です。日本の生き残りのためには「世界に通用する技術者」養成が不可欠。他の工業大学とも連携し、努力が続けます。

